

ドイツ語圏における移民史研究とジェンダー視点 ——クラウス・J・バーデ編『移民のヨーロッパ史： ドイツ・オーストリア・スイス』を読む——

Historical Migration Studies in German-Speaking Countries and Gender Perspectives: Reading “*European History of Migration: Germany, Austria, and Switzerland*” edited by Klaus J. Bade

大橋 彩乃
OHASHI Ayano

東京外国語大学大学院博士前期課程
Tokyo University of Foreign Studies, Master's Course

キーワード

ドイツ 「ガストアルバイター」 ジェンダー インターセクショナリティ

Keywords

Germany; “Guest Worker”; Women’s Labor; Gender; Intersectionality

原稿受理日：2023.12.16.

Quadrante, No. 26 (2024), pp. 163–173.

目次

はじめに

- 『移民のヨーロッパ史』の位置付けと評価
 - 本書の構成と第I部の概要
 - 意義と課題
- 近年の移民史研究の動向——ジェンダー視点の強化
 - 移民(史)研究とジェンダーの交差
 - ドイツ語圏の移民史研究とジェンダー：
2000年代以降の文献を中心に

おわりに

はじめに

本稿では、2021年に東京外国語大学出版会より刊行された、クラウス・J・バーデ編『移民のヨーロッパ史：ドイツ・オーストリア・スイス』（以下、『移民のヨーロッパ史』）について書評を行う。本書は、EU地域の移民史に関する共同研究の成果として、2007年から2008年にかけて

クラウス・J・バーデを中心に刊行された百科事典『ヨーロッパの移民——一七世紀から現在まで』¹より、第一部の「中央ヨーロッパ」で扱われた、ドイツ、オーストリア、スイスの移民現象の歴史の変遷を訳出し解説を付したものである。編者のバーデは、エアランゲン＝ニュルンベルク大学にて博士号を取得したのち、1980年代以降、ドイツの移民現象をテーマとした研究に精力的に取り組んできた。ドイツ移民史分野の第一人者として名高く、現在は同国のオスナブリュック大学名誉教授を務めている。

本稿は大きく二つの節から成る。第1節では『移民のヨーロッパ史』の全体的な構成を把握したうえで、評者が研究対象とするドイツの移民史について書かれた第I部を中心に、本書の意義と課題点を検討する。第2節では、とりわけ評者が関心を寄せている、移民労働史とジェンダー視点の接合という観点から、近年のドイツ語圏における移民労働史研究の動向を

¹ Klaus Bade/ Pieter Emmer/ Leo Lucassen/ Jochen Oltmer (Hrsg.), *Enzyklopädie Migration in Europa: Vom 17. Jahrhundert bis zur Gegenwart*, Paderborn/ München/ Wien/ Zürich, 2007.



複数の先行研究を通じて把握する。

1. 『移民のヨーロッパ史』の位置づけと評価

1-1. 本書の構成と第I部の概要

本書では、ドイツ、オーストリア、スイスの中欧三か国を中心に、各地域における人々の移住の様子を、近代初期から20世紀後半にかけて各国の政治・経済・社会的状況と重ね合わせながら通史的に捉えることに主眼が置かれている。バーデによる原書はヨーロッパ全域の移民現象を網羅的に扱っていたが、なかでも中欧地域を集中的に取り上げた点は本書ならではの切り口である。「はじめに」を執筆した増谷英樹²は、その理由として、本書に携わった訳者たちの専門分野と関心に加え、「中欧は、ヨーロッパにおける移民の中心地域だった一方で、『移動する人々』の問題を抜きにしては、この地域の歴史は理解できないし、語れないのである」（8頁）として、ヨーロッパ成立以後の移民や人の移動の歴史それ自体が、中欧地域と強固な結びつきを有していた事実を挙げている。というのも、ヨーロッパ成立以後の歴史上、人々の移動がとりわけ盛んに行われるようになったのは17世紀初めの「三十年戦争」（1618年から1648年にかけて続いた国際的宗教戦争）以降のことであり、この時期の移民現象は前述の三地域を中心に展開されていたからである。その後もフランス革命に伴う人口移動、20世紀の二つの大戦における強制移動、戦後の労働移民などヨーロッパの歴史を形作る人々の多様な移動はどれも中欧地域を主な舞台としていた。本書の構成に着目すると、序章で移民研究における主要な概念や多様な動機から成る「移民」の類型などの分析枠組みについて解説したのち、第I部ではドイツ、第

II部ではオーストリア、第III部ではスイスにおける移民現象を扱っている。そして、各部につき一章が同国の移民史叙述に充てられるとともに、章末には訳者による、移民・難民の対応をめぐる各国の近年の状況を交えた短い解説が付されている。加えて、第IV部では「各論—ミクロな視点からみた移民の現場」として、より地域や時期を絞った形で二つのマイノリティ集団の移動の事例に目を向けており、第4章では「東欧、東中欧、南東欧からのドイツ系避難民および被追放民たち」、第5章では「第一次世界大戦終結以降、南ティロールに居住しているイタリア人」の経験を取り上げている。以下では、評者が研究対象とするドイツを取り上げた第I部について、その概要を把握するとともに、移民史研究における本書の意義と課題を考えたい。

第I部第1章「ドイツにおける移民の歴史」は、バーデとヨッヘン・オルトマー³が執筆を担当している。冒頭では現在のドイツ連邦共和国の地図を示しつつ、同地域の地理的境界の流動性について触れており、19世紀のウィーン会議、20世紀の二つの大戦、戦後の東西分裂と再統一と、その時々々の政治状況により「ドイツ」の国境は引き直されており、それに伴い「国民」や「外国人」の定義も変容した点、そうした変化がしばしば人々の移動を引き起こしていた点を指摘している⁴。その後は、前述の三十年戦争終結後を起点として、時代ごとの多様な移民現象の出現や発展の様子が丹念に描写されている。以下ではその内容を大まかに紹介する。17世紀半ば、三十年戦争の主戦場となったドイツ地域は大幅な人口減少に見舞われたのち、領主の人口増加政策により中欧における新たな移民流入地域となり、特に宗教難民と

² 増谷英樹：東京外国語大学名誉教授。専門はオーストリア／ドイツ史、ユダヤ史、ウィーン都市史。

³ ヨッヘン・オルトマー：歴史学者。オスナブリュック大学「移民・異文化学研究所」（IMIS）特任教授。専門は近現代移民史。

⁴ クラウス・J・バーデ／ヨッヘン・オルトマー「第1章 ドイツにおける移民の歴史」（増谷英樹／前田直子訳）、バーデ編『移民のヨーロッパ史』101-161頁。

なったユグノーの移住はベルリンを中心にドイツの経済的・文化的発展をもたらした。18世紀に入ると、ドイツ地域は急激な人口増加に転じるとともに、東南欧やロシア東部など域外への人口流出も見られ、19世紀中盤から後期にかけてはアメリカ合衆国に向かう移民が多く生じた。この大西洋越え移民の増加の背景要因としては、農業中心であったドイツ社会が産業社会へと移行したことに伴う人口増大と、地域ごとの労働力需要の不均衡、血縁や地縁に基づくネットワークの強化に伴う情報網の広まりが挙げられている。また、1890年代にはドイツの工業化を受けてロシア国籍のポーランド人やイタリア人などが労働者として同国へ流入したが、外国人労働者に対する経済的利害は安全保障面を懸念する政治的利害と時に対立した。第一次世界大戦の勃発後には、戦時捕虜や「敵性外国人」とみなされた文民たちはドイツ戦時経済のための強制労働を課されるようになり、そうした手法は「教訓」としてナチ体制に受け継がれてゆく。そして、第二次世界大戦期の同国ではより大規模かつ徹底的な外国人強制労働システムが構築されるとともに、人種主義イデオロギーに基づく迫害から逃れるべくユダヤ人を中心に大量の亡命者が生じた。終戦を迎えると、ナチの収容所を生き延びた「ディスプレイスド・パーソンズ」、疎開者、旧第三帝国領やドイツ人入植地からの被追放民などが一気にドイツへ流れ込み、同国の社会秩序は混迷を極めた。そして、冷戦下における同国の東西分裂、経済成長および再統合の時期には、二国間協定を通じて募集された外国人労働力

(西ドイツ地域においてはいわゆる「ガストアルバイター」⁵⁾や、東欧や南欧出身でドイツ系のルーツを有する「引揚者」、戦後の基本法で明文化された庇護権を求める難民など、出自も動機も大きく異なる新たな移住者たちが登場した。ドイツ社会や民衆にとって、これらの人々の統合や共生に向けた模索は、現在も議論が続く「移民問題」の始まりであったといえる。このようにドイツにおける移民の歴史を概観すると、同国の近現代史のいくつもの重要な場面において、移動する人々の存在が大きな影響を与えていたことは明らかであり、増谷の指摘の通り、近現代ドイツ史と同地を取り巻く移民の動きは不可分であると理解できる。加えて、訳者の前田直子⁶⁾による解説では、ドイツのアンゲラ・メルケル前首相が掲げた難民・移民政策に焦点を当てつつ、2015年の「欧州難民危機」に際する経済界の積極的な対応や、ドイツに到着した難民に対する市民の歓待といった昨今のドイツ社会の動きを紹介している。第1章と解説を併せて読むことで、ドイツの「移民大国」としての顔はここ数年で形成されたわけではなく、ヨーロッパ、とりわけ中欧地域における何万もの人々の移動の歴史に深く根ざしており、そうした過去と現在が地続きであることが見えてくる⁷⁾。

1-2. 意義と課題

本稿の冒頭で紹介したとおり、本書『移民のヨーロッパ史』はヨーロッパ全域の移民現象に関する百科事典の翻訳書であり、内容面では移民史研究の分野にとって新しい視点や見解を

⁵ 「ガストアルバイター (Gastarbeiter)」とは直訳すると「ゲスト労働者」を意味するドイツ語由来の用語であり、主に1960年代から1970年代にかけて二国間協定に基づき中欧ヨーロッパ地域各国で移住・就労した出稼ぎ労働者を指す。「ゲスト」という部分からわかるように「協定で定められた雇用期間を終えたら出身国へ帰還する」という前提を暗に含んだ名称であり、しばしば当事者を揶揄するニュアンスを含んだため、現代の移民労働者に対する名称としては一般的には使われていない。

⁶ 前田直子：獨協大学大学院外国語学研究所博士後期課程修了、博士(ドイツ文化)。専門分野はドイツ移民統合政策。

⁷ 前田直子「訳者解説 ドイツはなぜ移民を受け入れたのか——ドイツ難民・移民政策の現状」バーデ編『移民のヨーロッパ史』162-174頁。

提示するよりも、これまでの先行研究から得られた知見の集大成としての側面が大きい。そのため、同分野に関してある程度の知識を有する読者にとっては、すでに他の文献で明らかにされている内容も少なくないため、やや物足りなさが残るかもしれない。しかしながら、「おわりに」において穂山洋子⁸が「本書は移民・難民問題に興味を持つ一般読者や学生向けに編まれたものである」（314頁）と明言しているように、本書は特に、これまで中欧の歴史や移民に関する研究に触れてこなかった読者の理解を促すべく、さまざまな工夫が凝らされている。例えば、「はじめに」の部分では本書出版の経緯とともに、17世紀以降の中欧地域の歴史が大まかに紹介されており、学生や研究者でなくとも本編の時代背景を理解しながら読み進めやすくなっているほか、索引には日本語、ドイツ語、英語を用いた表記が付されており、本書から発展して外国語文献を手取る際にも役立つに違いない。さらに、巻末には本書の内容に関連する一般書や研究・専門書、映画作品まで幅広く紹介するページを用意するなど、読者が自身の関心や知識の程度に沿ったコンテンツを探すためのヒントも提供している。また、ドイツ移民史の章においては、特に第二次世界大戦後やドイツ再統一前後の時期に関する記述に際し、訳者が原文に対して独自に「被追放民」や「引揚者（アウスジードラー）」といった難民・移民のカテゴリーに基づく小見出しをつけたうえで内容を区切って訳出している。こうした工夫は、読者が人々の移動の多様な背景要因や動機、各カテゴリーに属する人々が置かれた状況の違いをより明確に把握するための一助となるだろう。もちろん、初学者のみならず移民史分野に対する見識が深い読者にとっても、「百科事典」として正確な知識に裏打ちされている

本書は、中欧地域の移民史を語る上での基礎を確認する素材として有益である。

加えて、本書の特色として、中欧ヨーロッパ地域の移民史を主軸としつつ、それらを単に一地域における過去の出来事としてではなく、今まさに進行している多様な「難民・移民問題」をより多角的に考察する足掛かりとして理解しようとする姿勢を打ち出している点が挙げられる。現代的な話題との接続という面では、前述のように訳者解説において、ドイツの対難民・移民政策、オーストリアの選挙、スイスにおける外国人労働力受け入れをめぐる議論といった、難民や移民、外国人労働者との関係をめぐる各国のここ数年の動きに焦点を当てている。ほかにも、ドイツに関する第1章に注目すると、東西統一以降に関する項目において、原書出版以降の同国やEU圏の状況を踏まえつつ元の内容やデータを修正・加筆し、より最新の情報に近づける努力がみられる。さらに書籍の中では、ここ数年の新型コロナウイルスの世界的流行に伴う移民労働者の苦境や、日本の外国人技能実習生、いわゆる「仮放免」の地位に置かれた人々の問題に触れている箇所もある。こうした記述から、本書は読者に対して中欧地域と移民現象の数世紀にわたる深い関わりを示すとともに、現代ヨーロッパ、ひいては日本国内の難民・移民政策の現状や課題を捉えなおす契機を提供しているといえよう⁹。

以上で挙げたように、本書は多様な関心を持つ幅広い読者層にアプローチするための工夫が随所に織り込まれた、移民史研究の射程を拡大しうる良書である。しかしながら、一点だけ批判を述べるならば、本来多様な構成員から成るはずの移民集団がしばしば画一的に描写されており、なかでも性差に基づく人々の経験の差異が等閑視されがちである点が挙げら

⁸ 穂山洋子：同志社大学グローバル地域文化学部准教授。専門はスイス近現代史。

⁹ バーデ編『移民のヨーロッパ史』22, 29, 313-314頁。

れる。本稿第二節でも取り上げるが、移民研究の領域においては、長いこと、男女を問わない包括的な集団としての「移民」を叙述する際、実際には男性移民が念頭に置かれており、女性移民の経験は男性移民のそれと同一視されるか、「(男性)移民の妻」という役割に沿って描写されてきた。本書においては、ヴァイマル共和国期のドイツ人移民や第二次世界大戦期の外国人強制労働者、東ドイツにおける「外国人就労者」の中に一定数女性が存在していたことに言及していたり、「男女の外国人労働力／男女の労働移民」という言葉を用いたり、既存の研究書と比べるとジェンダー視点を少なからず取り込んでいるといえるだろう。しかし、百科事典の翻訳書であり概説書という性質もあってか、基本的には各時代の移民・外国人がナショナリティを軸にした、一枚岩的な集団として記述されているように感じられる¹⁰。研究対象の時代によっては史料上の制約もあると思われるが、後述するように、特に第二次世界大戦後の時期の労働移民については、外国人女性労働者に焦点を当てた研究や男女双方の移民に対するインタビューを下敷きにした研究など、2000年代以降ジェンダーの観点により重きを置いた先行研究の蓄積が進んでいるため、こうした研究成果をさらに反映できれば、本書はより包括的なドイツ移民史を叙述することができたのではないだろうか。

第2節では、以上の批判点を踏まえ、ドイツ語圏における近年の移民史研究の傾向の一つとして「ジェンダー視点の導入と強化」がどのように展開されてきたか、その背景や動向を振り返りたい。

2. 近年の移民史研究の動向——ジェンダー視

点の強化

2-1. 移民(史)研究とジェンダーの交差

現在、難民や移民、外国人労働者といった主題は様々な研究分野において取り組まれており、その範囲の広さは捉えきれないほどである。なかでも、移民史研究に目を向けると、特に2000年代以降、ジェンダーの視点を強化し女性移民の存在やジェンダーによって異なる移住の経験に注目することで、男性中心であった従来の「移民」像の多様化を図る傾向が見て取れる。こうした傾向は、どのような学術的背景によってもたらされたといえるだろうか。以下では、歴史学領域を中心に、移民(史)研究とジェンダーの交差に繋がる主要な研究潮流について把握する。

第一に、「移民」と「ジェンダー」はどちらも、歴史学分野においては比較的新しいテーマでありながら、過去数十年の間で急速に研究規模が拡大・発展したという点は重要である。移民史研究については、本書において東風谷太一¹¹がドイツ語圏における移民(史)研究の歴史を紹介しているが、その本格的な始まりは1980年代に入ってからのものであり、原書の著者であるバーデはまさに同分野のパイオニアの一人である¹²。東風谷はこのタイミングで移民史研究が前進した背景として複数の要因を指摘しており、一つは19世紀後期、人口管理に対する関心から出発したのちに人種衛生学と結びつき、ナチ体制を間接的に支えた戦前・戦時期の移民研究が、戦後に一定程度の時間とナチ体制や戦争責任に対する社会的議論を経て改めて向き合われるようになったこと、もう一つは当時のドイツ社会で外国人労働力の受け入れが進む中で、移民に対する関心が必然的に高まったことがある。さらに、移民史研究の

¹⁰ 同上、121, 126, 131, 138, 144-145頁。

¹¹ 東風谷太一：東京外国語大学大学院総合国際学研究院特別研究員。専門はドイツ近代史。

¹² 東風谷太一「訳者解説 ドイツ語圏における移民史研究の歴史」、バーデ編『移民のヨーロッパ史』90頁。

発展にかかわる歴史学全体での重要な変化として、「社会史、ジェンダー史、日常史、文化史といった新たな潮流が研究の地平を押し広げたこと」が挙げられている点に注目したい¹³。20世紀後半、政治や経済、情報通信に至るまで社会のあらゆる側面で国境を越えた関係が急速に構築される中、歴史学領域においては(国民)国家を研究上の主要な枠組みとしていた従来のアプローチを批判的に捉え、新たな研究対象や手法を模索する様々な試みが登場した。移民史やジェンダー史はこうした試みの中で培われた分野であり、前者についてはまさに「人の移動」がグローバリゼーションの時代を象徴する現象として新たな研究関心の的となる中で大きく進展したといえる。地球規模の視座に立った歴史学研究は、現在のグローバル・ヒストリー研究に繋がるが、ヴォルフガング・シュヴェントカー¹⁴はこうした視点に基づく歴史叙述において「移民研究者の右に出る者はいない」と評している¹⁵。また、同氏は移民(史)研究の注目すべき点として「マクロヒストリーとミクロヒストリーの視点が交差させることができるという点」を挙げている¹⁶。つまり移民(史)研究においては、時間や空間の面でより広い範囲を対象とすると同時に、個々の移民やその家族、コミュニティなど、よりローカルな文脈にも目を向けるという、従来のナショナル・ヒストリー色が強い研究では一般的ではなかった二つのアプローチが同時に展開されており、東風谷が述べたように、社会史や日常史といったその他の歴史学分野の発展とも不可分であった。

後者のジェンダー史の広がりにも際しても、既存の歴史学研究に対する批判や挑戦の姿勢は明確である。同分野の代表的な研究者として、ジョーン・スコット¹⁷は、従来の女性史が単に女性の過去に関する情報収集に留まり、男性中心の歴史学の構造それ自体を変革させるには至らなかった点を問題視した。さらに同氏は、1970年代に欧米圏で盛んになったフェミニズム運動において、「ジェンダー」という語とともに男女の性差は身体ではなく社会によって規定されたものであるという認識が浸透する中、「専門分野としての歴史学は、その実践をとおして、過去一般についての知と同時に、不可避免的に性差についての知をも生み出している(…)。歴史学は、ジェンダーの構築を裏づけ、宣言する特殊な文化的制度として作用しているのである」として、歴史学が過去を叙述する中で図らずも性差に関する社会通念を絶えず強化してきた事実を指摘した¹⁸。こうしたスコットの視座は、特に1960年代以降、哲学分野を起点に広まった「言語論的転回」、つまり言葉とそれが指すものの関係を恣意的と捉える考え方に根ざしている¹⁹。「女」や「男」といったカテゴリーを自明視することを避け、むしろそうした差異や不平等が形成されるプロセスを批判的に問い直す取り組みは女性史を超えた「ジェンダー史」として成長し、移民史と同様、ジェンダー・セクシュアリティ研究やクィア理論といった他の学問領域との相互作用の中で研究領域の拡大を続けている。

加えて、歴史学の外側の動きにも着目すると、移民史研究とジェンダーの交差に影響を与

¹³ 同上、92頁。

¹⁴ ヴォルフガング・シュヴェントカー：大阪大学人間科学研究科教授。専門は文化・思想史。

¹⁵ ヴォルフガング・シュヴェントカー「グローバリゼーションと歴史学——グローバルヒストリーのテーマ・方法・批判——」、『西洋史学』224号、265-281頁。ここでは274頁。

¹⁶ 同上、274頁。

¹⁷ ジョーン・スコット：プリンストン高等研究所社会科学部教授。専門はフランス史・ジェンダー史。

¹⁸ ジョーン・W・スコット、荻野美穂訳『増補新版：ジェンダーと歴史学』平凡社ライブラリー、2004年、40頁。

¹⁹ 小田中直樹『歴史学のトリセツ——歴史の見方が変わるとき』ちくまプリマー新書、2022年、80頁。

えた学問潮流として、国際社会学における「移動の女性化」研究の興隆が考えられる²⁰。「移動の女性化」とは、1980年代末期から1990年代にかけて世界規模でみられるようになった、若年女性による単身移住の増加傾向を指しており、具体的には発展途上国エリアから先進国エリアに向けた移住家事労働者の増大などがある。こうした「移動の女性化」研究の第一人者であるラセル・サラザール・パレーニャス²¹は、アメリカとイタリアにおける事例をもとに、1990年代前後から増加した女性家事労働者の移住現象を分析した。同氏によれば、20世紀後期、フェミニズム運動の影響で先進地域において賃労働に参加する女性が増える中、女性たちが従来家庭で担ってきた無償の生殖活動や家族のケアといったいわゆる「再生産労働」にかかる時間が減少した。そして、そうした変化にもかかわらず再生産労働をめぐる女性中心のジェンダー規範は維持されたことから、先進国女性の不在を埋めるべく女性移民労働者に対する需要が高まったとして、パレーニャスは一連の流れを「再生産労働の国際分業」と呼んだ。ほかにも、ドイツにおける文脈に注目した研究者としてはミリヤナ・モロクワシチ＝ミュラー²²が名高い。同氏は「移動の女性化」が広く知られる以前の1980年代中盤から、同時代研究の一環として当時のヨーロッパ地域における女性移民の労働に注目しており、自身の論文では旧西ドイツ国内でトルコ人女性の労働が不可視化される傾向があることを指摘し

た。その背景としては、当時のヨーロッパ地域において支配的であった、女性に対する「主婦」規範が労働市場における女性の価値を下げるとともに、非ドイツ人の就労の機会が非常に限られた中で、結果的にトルコ人女性はトルコ系企業にて家族の一員同然の身分で働くような選択肢しか選べなかったことを挙げている²³。また、モロクワシチ＝ミュラーはトルコ人女性の就労における宗教規範とジェンダー規範の交差にも注目しており、例えば旧西ドイツにおいて、女性移民たちの低賃金かつ不安定な雇用が、「男尊女卑の根深い」イスラム教の「抑圧的な環境から抜け出す手段」という、宗教的なステレオタイプに基づいた解釈を通じて正当化された点を強調している²⁴。このような多角的な分析視座は、現代の移民研究においても大いに応用可能なものであるといえよう。

2-2. ドイツ語圏の移民史研究とジェンダー：2000年代以降の文献を中心に

20世紀後半以降、歴史学においては既存の研究上の枠組みに対するさまざまな挑戦がなされる中で、移民史やジェンダー史といった新たな研究領域が形成され、それらは歴史学内外のさまざまな研究分野と相互に関わり合いながら発展した。そして、移民史研究の分野では2000年代前後から、従来支配的であった移民イメージをジェンダーの視座から相対化したうえで、それまでの男性中心の移民史の語りとは異なる歴史叙述のあり方を模索する動き

²⁰ 国際社会学分野における「移動の女性化」研究の動向に関しては、伊藤るり「国際労働移動をジェンダー視点で読む—gender and migration 研究領域の形成・展開・意義」、北海道大学文学大学院、応用倫理・応用哲学研究教育センター主催公開シンポジウム「国際労働移動とジェンダー」記録、6-12頁。https://caep-hu.sakura.ne.jp/files/gendersympo2019.pdf (2023年9月24日最終閲覧)を参考とした。

²¹ ラセル・サラザール・パレーニャス：社会学者。南カリフォルニア大学教授。労働、ジェンダー、国際移住、家族、経済社会学を主な研究テーマとする。

²² ミリヤナ・モロクワシチ＝ミュラー：フランス国立科学研究センター所長およびパリ・ナンテール大学(パリ第10大学)名誉教授。現代ヨーロッパにおける女性と移動を専門とする。

²³ Mirjana Morokvasic, Birds of Passage are also Women..., *The International Migration Review*, Vol. 18, No. 4, pp. 886-907, 1984, hier p. 889.

²⁴ Ibid.

が徐々に登場した。以下では、評者が研究対象とする、20世紀後半のドイツにおける労働移民に関するいくつかの文献を通じて、ドイツ移民史分野の研究潮流を理解する。

ドイツ移民史の文脈においてジェンダーの側面を明確に研究課題とした第一人者としては、モニカ・マッテス²⁵の名が挙げられる。1990年代以降、旧西ドイツ時代の公文書の閲覧制限が徐々に解かれ、当時の外国人労働者政策に関する情報量が増大するなかで移民の性差に着目した研究が登場したことに影響を受け、マッテスは「ガストアルバイター」として1950年代から1970年代にかけて旧西ドイツへ渡った女性移民労働者に関する研究書を2005年に出版した²⁶。同書では、当時の連邦雇用・失業保険庁や各州の雇用局の統計において性別がカテゴリーとして確立されておらず、一次史料それ自体が女性を不可視化する傾向にあった点を指摘しつつ、繊維・被服業、食品加工業、清掃業など長らく「女性の仕事」とみなされてきた業種を中心に、性規範を維持しつつ男性移民以上に安価に雇える労働力として外国人女性に偏った需要が生じていた点、女性たちは賃労働に加えて妊娠や出産、育児など家庭における再生産やケアの役割も担い、その両立が責務とされた点、その役割ゆえに女性労働力の募集や斡旋が時に男性の募集以上に困難を極めていた点などを示した。そして同書全体において、「外国人」と「女性」という二つのマイノリティ属性を有した「女性ガストアルバイター」の経験は男性移民のそれとは明確に異なり、「ガストアルバイター」全体の共通体験としては単

純に還元できないと強調されている。さらにマッテスは、1970年代初頭の旧西ドイツ社会において、女性の就労増加や「移民問題」が公的な議論のテーマとなることが増えたものの、前者はドイツ人女性を主な対象とし、後者は治安の乱れが主な論点とされていたため、移民女性が日常生活で被る抑圧は双方の議論において周縁化されていたことを指摘した²⁷。また、具体的事例として、西ベルリンの電機コンツェルン「ジューメンズ」と、ハノーファーの「バールセン」製菓工場における外国人女性の斡旋や就労の状況が取り上げられているが、特に後者は建築業や鉄鋼業等で肉体労働を行うような男性的な「ガストアルバイター」像が支配的であった頃には、「女性的な」職場であるがゆえに注目されにくかったと考えられる。製菓工場の事例では、菓子の製造ノルマ引き上げに抵抗したスペイン出身女性を中心とするストライキの記録が参照されており、単に当時の外国人女性の就労実態を示すのみならず、女性たちの主体的な労働者意識の可視化にも繋げている²⁸。

2010年代には、ドイツ語圏の移民史研究の分野において、ジェンダーの視点を意識的に取り入れる動きがより加速しているように思われる。その成果を部分的ながら取り上げると、2011年にはヨーロッパにおける歴史、移動、女性の関わり合いをテーマとした論文集である『フェミナ・ミグランス：移民プロセスにおける女性たち(18-20世紀)』が編纂・出版された²⁹。同書は2010年にバーデン＝ヴュルテンベルク州で開催された学術会議の内容を基盤としており、導入部分において編者たちは、前

²⁵ モニカ・マッテス：ライブニッツ教育研究教育情報センター(DIPF)教育史研究図書館研究助手。主な研究テーマは移民史や家族・ジェンダー史。旧西ドイツの「ガストアルバイター」女性に関する研究で博士号を取得した。

²⁶ Monika Mattes, „Gastarbeiterinnen« in der Bundesrepublik: Anwerbepolitik, Migration und Geschlecht in den 50er bis 70er Jahren, Frankfurt a. M., 2005. なお、マッテスは自身の視座に影響を与えた先行研究として、カレン・シューンヴェルターとバーバラ・ゾネンベルガーの研究を挙げている(S.18)。

²⁷ a.a.O., S.240.

²⁸ a.a.O., S.303-311.

²⁹ Edeltraud Aubele/ Gabriele Pieri (Hrsg.): *Femina Migrans. Frauen in Migrationsprozessen (18.-20. Jahrhundert)*, Sulzbach/Taunus, 2011.

述の研究者たちと同様、従来の移民研究の中で長らくジェンダーの側面が周縁的な要素として位置づけられ、十分に顧みられてこなかったことへの問題意識を共有している。また、本書の特徴として「歴史的ジェンダー研究を現代の政治的議論と結び付ける」(S.9)という目標を達成すべく、18世紀から20世紀を研究対象とした歴史学系統の論文と現代の移民統合政策を軸に置いた社会学系統の論文を一冊に収めている点が挙げられる。各論文は取り上げるテーマも時代も様々であるが、「移民／移住とジェンダー」という研究テーマの可能性の広さを感じさせる一冊である。2013年には、1960年代から1970年代にかけてオーストリア・ケルンテン州へ労働移住した外国人女性を主題に据えた研究書、『ケルンテンの「女性ガストアルバイター」たち：女性の労働移住の足跡を探して』（以下『ケルンテンの「女性ガストアルバイター」たち』）が登場している³⁰。『移民のヨーロッパ史』第2章でも言及されているが、旧西ドイツと同様、オーストリアでも1960年代中盤以降、労働力不足の解決策として「ガストアルバイター」政策が進められ、主にトルコと旧ユーゴスラヴィアから多数の労働移民が流入した。同書は当時のメディアが特に女性「ガストアルバイター」をどのように表象し、そこから移民労働者に対していかなる社会的イメージが形成されていたかを新聞記事の事例から分析するとともに、当時ケルンテン州に労働移民として渡った女性たちに対するインタビュー記録を通じて、社会一般的な「ガストアルバイター」像と、当時を生きた人々の主観的な語りとの差異を可視化させることに主眼を置いている。著者

は、女性移民が記事の中でしばしば「従順な働き者」や「家父長制の被害者」として描写されたのに対し、当の女性たちは劣悪な労働・生活環境の下でも常に闘争心を抱いていたことを強調している。加えて同年には、『彼女の闘争はあなたの闘争だ：1970年代初頭の西ドイツにおける「ゲスト労働者」労働運動』という題で、旧西ドイツにおける外国人女性労働者の主体性を労働争議の事例から明らかにすることを試みた論文も発表された³¹。同論文は1970年代初頭、ノルトライン＝ヴェストファーレン州の自動車部品工場における、外国人女性労働者を中心としたストライキを主な題材としており、ストに際して女性たちは男性優位の賃金構造の是正を求めた。同時期はドイツ経済が陰りを見せるなかで「ガストアルバイター」募集の停止が議論され始めたタイミングであり、そうした社会情勢に対抗すべく、外国人労働者主導の労働争議が複数発生していたが、この事例の特徴としては、性差別的な環境の改善という共通目標の下で「女性ガストアルバイター」の闘いにドイツ人女性労働者も加わった点が挙げられる。筆者は同時に、当時のフェミニストや社会学者がこうした外国人女性たちの努力にほとんど注目しなかったとして、ドイツの女性史研究における移民女性の不在についても言及している³²。

そして、比較的新しい研究書としては、2017年出版の『募集された：1960年代、1970年代のオーストリアにおける(男女)ガストアルバイターたち』（以下『募集された』）が挙げられる³³。同書は『ケルンテンの「女性ガストアルバイター」たち』と同じく、第二次世界大戦後の経

³⁰ Elisabeth Koch/ Viktorija Ratković/ Manuela Saringer/ Rosemarie Schöffmann, „Gastarbeiterinnen‘ in Kärnten: Auf Spurensuche der weiblichen Arbeitsmigration“, Klagenfurt, 2013.

³¹ Jennifer Miller, Her Fight is Your Fight: “Guest Worker” Labor Activism in the Early 1970s West Germany, *International Labor and Working-Class History*, Volume 84: *Crumbling Cultures: Deindustrialization, Class, and Memory*, 2013, pp. 226-247.

³² Ibid., p. 239.

³³ Velen Lorber, „Angeworben: GastarbeiterInnen in Österreich in den 1960er und 1970er Jahren“, Göttingen,

済発展が進んだオーストリアで就労した「ガストアルバイター」を研究テーマに据えている。なかでも著者は旧ユーゴスラヴィア出身の労働移民に焦点を当て、前半では受入国のオーストリアと送出国の旧ユーゴスラヴィアの政治・経済・社会的背景および二国間関係の形成過程を解説し、後半ではオーラルヒストリーの手法を通じ、労働目的でオーストリアに渡った旧ユーゴスラヴィア出身の人々計15人に対して、当時の生活や就労状況を聞き取った結果をまとめている。従来の移民史研究における女性の存在の周縁化や女性移民に対する伝統的性役割を前提としたまなざしを批判し、行動的な主体としての女性移民の可視化を研究上の目標に掲げた点は、これまでに挙げた先行研究と同様である。だが、同書の特色として、男女のゲスト労働者を包括した「GastarbeiterInnen」という語をタイトルに据えているように、研究対象として男女双方の移民に目を向けたうえで、従来のように多様な経験を（男性移民を中心として）一緒くたに「移民の歴史」とまとめ上げるのではなく、具体的な語りから各自の経験の間の差異と共通性を描出しようとしている点が考えられる³⁴。一例として、移民たちの余暇に関する聞き取り内容に注目すると、異国の地で日々過酷な労働に従事する合間に同郷出身者どうしでクラブ等に集まり、くつろぎながら歓談や音楽に興じる時間が楽しみであったという回想が男女双方から聞かれた中、ある女性は、同郷の男性による自身に対する性的な態度や発言が不快であったため集まりへの参加を避けていたと述べたという。この事例からは、「同郷出身者のコミュニティの重要性」が性別を問わず移民全体に共有されつつも、「女性」であるが故に対処しなくてはならない困難も確かに

存在していたことが見えてくる³⁵。『募集された』以前に挙げた諸研究では、それまでの男性中心的な移民史研究に対する批判的取り組みとして、女性移民の存在や経験が男性移民のそれとは切り離されて分析されることが多く、対して男性移民の経験は十分に相対化されてこなかったように感じられる。つまり、移民史研究においては未だ「ジェンダーの視座」というよりも女性史的な視座に重点を置く傾向にあった。女性移民に関する情報それ自体が欠如していた状況下ではそうしたアプローチも有効であったと思われるが、ここまで見てきたように2000年代中盤から2010年代にかけて女性移民に関する知見が着実に積み上げられてきたことを踏まえれば、今後はさらに一步踏み込んで、従来の移民史研究における男性中心性そのものを再考するような、よりジェンダー史的な分析手法が重要になるのではないだろうか。『募集された』は女性と男性、双方の移民個人の語りを歴史叙述の基盤に置いたという点で、こうした分析手法を取り入れた試みの一つとして数えられる。

おわりに

本稿では、『移民のヨーロッパ史』における移民像の画一性を批判的に取り上げるとともに、近年のドイツ語圏における移民史研究の動向の一つとして、ジェンダー視点を強化した研究の成果を部分的ながら概観した。社会全般におけるジェンダー問題に対する関心の高まりも相まって、こうした研究の流れは今後より一層強まっていくと考えられる。加えて、歴史学分野を含む移民研究全体にとって「インターセクショナルリティ」という分析概念は以後ますます重要なキーワードとなるだろう。同概念は「交

2017.

³⁴ GastarbeiterInnen というドイツ語の名詞は、「男のゲスト労働者たち」を意味する「Gastarbeitern」と「女のゲスト労働者たち」を意味する「Gastarbeiterinnen」の二語を合体させた、ジェンダー中立性を意識した表現である。

³⁵ Lorber, „Angeworben“, S.232-238.

差性」とも訳され、一般的には「交差する権力関係が、様々な社会にまたがる社会的関係や個人の日常的経験にどのように影響を及ぼすのかについて検討する概念である」（コリンズ／ビルゲ、16頁）とともに、「とりわけ、人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、階級、ネイション、アビリティ、エスニシティ、そして年齢など数々のカテゴリーを、相互に関係し、形成し合っているものとして捉える」（同上）分析的枠組みと定義されている³⁶。移民史研究においては、移民を画一的集団としてではなく多様な動機や考えを持つ個人やその集まりとして理解すると同時に、彼ら、彼女らが置かれた状況をジェンダー、国籍、民族性、年齢、宗教的所属など多角的な視座から考察することが求められる。とはいえ、第2節で取り上げたモロクワシチ＝ミュラーが「インターセクショナルリティ」という用語を使わずとも同様の観点から論じたように、女性移民や移民の性差に関する研究において、こうした分析手法は決して新しいものではない。むしろ、移民とジェンダーに関するこれまでの研究成果が、将来的に移民史分野全体に「インターセクショナルリティ」の枠組みを広める第一歩となることが予想される。

『移民のヨーロッパ史』はこれまでの中央ヨーロッパ地域における移民史研究の集大成ともいえる内容であり、ドイツ・オーストリア・スイス各国の歴史と移民・難民・外国人労働者との関わりをわかりやすく網羅的に伝える、移民研究や移民問題に関心を持つあらゆる人のための必携の書といっても過言ではない。ただ、「移民」を中心的なテーマに据えつつも、本書の主眼は「ヨーロッパ史」に置かれているため、第2節で紹介した近年の移民史研究で取り組まれているような、多面的な移民像を提示する試みの成果が取り入れられているとは言い難

い。もしもこれらの研究において培われた視座を本書にも反映したならば、移住促進の宣伝や移民個人の手記、移民労働者の就労記録などの史料を用いて、男女の移民の間での移住に関する動機や関心の差、移住先における性役割の変化の有無などを明らかにし、移民たちの視点から当時のヨーロッパ社会の様子を捉えるアプローチも可能であったのではないだろうか。個々の移民のライフヒストリーに即した記述を取り入れることで、原書が本来担っていた移民研究の「百科事典」としての性質は薄れてしまうかもしれない。しかし、ヨーロッパ全体を研究対象としていた原書からあえて中欧地域を取り上げ、さらには現代的なトピックを盛り込むなどの独自性を有する本書においては、移動する主体の側に焦点を当てた記述が加えられたとしても、研究書それ自体の意義が損なわれることはないはずだ。本稿では日本国内の移民史研究の動向については言及しなかったが、本書で得られる知見を土台として、国内においても今後より多面的な移民史研究が登場・発展するとともに、そうした研究の蓄積を経て、本書以上に包括的な移民研究の新たな「百科事典」が編纂されることを期待したい。

³⁶ パトリシア・ヒル・コリンズ／スルマ・ビルゲ著、小原理乃訳、下地ローレンス吉孝監訳『インターセクショナルリティ』、人文書院、2021年。